
姫君は留学生

月乃宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫君は留学生

【Nコード】

N3499V

【作者名】

月乃宮

【あらすじ】

海を越え、はるばる東国イェーンから西国ユーロリアへやってきた姫君フミは留学生。お世話になるユーロリア国王一家には三人の个性的な王子様がいて……フミは異国の地でうまくやっていけるのでしょうか？ ファンタジー・留学ラブコメディです

(1) 西国ユーロリア

叔父上様

お元気ですか。

とうとう西国ユーロリアに到着しました。

大きな港が見えたとき、ようやく半月かけた船旅が終わるとわかってホッとなりました……

「この中身はなんですか」

港の検問所で手荷物をひらいたフミは一瞬、言葉につまった。

ええと、これはユーロリア語でなんて言っただけ……。

ほんの半刻前に船旅を終えたばかりのためか、フミはまだ自分の体がゆれているように考えがまとまらない。目の前には愛想のかけらもない表情を浮かべた検査官。ちよつと怖い。

すると奥の事務所から別の検査官が現れ、フミの前に立つ制服姿の男の肩をたたいた。

「交代の時間だ」

目深にかぶった帽子からのぞくアイスブルーの瞳に、フミはぎく

りと身を縮める……『ああやっぱり西国の人だ。おつきい人だなあ
じっさいその男は背が高かった。それは東国の女性の平均的身長
であるフミが、まるで子供のように感じてしまうほどだ。

「これは……どうやって使うものですか」

男は手荷物の中身をのぞきこんで眉を上げた。フミはしどろもど
ろになりつつ、慣れない外国語で必死に説明し始める。

「これは、料理の道具です。この木の板についている刃で、乾燥さ
せた魚の身を削ります」

「乾燥させた魚、といましたか？」

「はい。うちの国、東国では一般的な食べ物です……蒸した穀物に
かけて食べます」

すると男が口もとを軽くあげた。

「なるほど、故郷の味が恋しくなるでしょうからね」

「あ、はい……」

「よろしい、では出口へ向かってください」

フミは手荷物を返してもらうと、ペコリと頭を下げた。出口へと向
かった。

内心ひやひやしていたが、どうやら無事に入国できそうだ……フ
ミは明るい気持ちに胸を膨らませた。

東国イエーンの国王と王妃の間には、二人の王子と二人の姫がいた。

末っ子の姫君であるフミは国王夫妻が年をいってから授かった子だったため、他の兄王子や姉姫ら三人とはだいぶ歳が離れてた。

だから家族はフミに対して過保護だった。

「西国へ留学したいとな？」

「だめだだめだ、フミはまだ小さいんだから！」

「でも十八歳ですよ？」

「異国の地で病気にでもなったらどうするんだ」

「ホストファミリーは西国の国王一家でしょう？ 友好国だし大丈夫ですよ」

国王一家は大騒ぎとなったが、けっきょくフミの願いは聞き入れられた。皆そろって末っ子の姫には甘いのだ。フミは『ダメもとで頼んでよかった』とよころんだ……

……のも、つかの間。

叔父である宰相に猛反対された。

姪のフミがかわいくて仕方ないのだ……城から、この国から離れるなんてとんでもない。そんなにまでして勉強して、なんになる？

「だって将来、叔父様のお仕事のお手伝いができるわ」

「……フミ」

「叔父様も以前おっしゃっていたでしょう。『異文化に触れて見聞を広めるのは良いことだ』って」

「それは」

「だから私、政務でお忙しい叔父様の代わりに西国へ行って、いろ

いる学んでくるよ」

宰相は目頭を押さえた……どうしよう、かわいすぎるこの生き物。

「じゃあ決まり。お父様にもそう伝えておくね」

「あ、コラ待ちなさい、フミ……」

「毎月お手紙書くから」

「……毎週、にしなさい」

「うん！」

ハッ、と宰相が気づいたときには遅かった。

もう撤回できそうにない。でもフミからのお手紙はおいしすぎる

……しかたあるまい。

こうしてフミは西国へ旅立ったのだった。

「姫様、ご無事でしたか」

「大げさだなあ、ただの検問所だよ？」

フミは笑っていたが、内心微妙な気持ちだった。

その隣では、フミのお付きの侍女マリが渋面で首をふっている。

「まさかあれほどガタイが良いとは……おそろしゅうございました。
西国の男性は皆あんな巨人なのでしょうか」

「異国人だもんね。あ、ここでは私たちが異国人か」

フミは再び笑ったが、やはりマリは笑わなかった。

(2) お城へようこそ

港から馬車で半日かけ、フミ達一行はユーロレリア国王一家の住む宮殿に到着した。

「すごい……」

フミをはじめ、侍女マリや護衛官らはそろってポカン、と口を開いた。きらびやかな白い建物は夢のようにきれいで、悪夢のように巨大だった。まるで白い怪物だ、とフミは飲まれる思いで見上げていた。

正門ではたくさんの兵士が警備にあたっており、時おり指揮を執る騎士の姿も見える。騎士達のあざやかな青や赤のマントがひるがえり、なにやら物々しい雰囲気にも包まれていた。

「ようこそ、ユーロレリア王宮へ」

出迎えてくれたのは縦にも横にも大きな、立派な口髭を生やした男だった。マリに小声で「姫様、ごあいさつ」とささやかれ、フミは我にかえって深々とおじぎをした。

「お世話になります、フミです。これからよろしくお願いします、王様」

「私は国王陛下ではありませんよ。国交大臣のバザンです。どうぞお見知りおきを」

逆に丁寧に会釈をされ、フミはすっかりあわててしまった。

「し、失礼しました！」

「いえいえ。本物の陛下は奥でお待ちです。どうぞ」

なんだか肩が少し落ちてしまう。ちょっとあわてちゃった、失敗しっばい……。

気をとりなおしたフミは顔をあげて宮殿内を見回した。通り過ぎるなにもかもがめずらしく、あとでゆっくり見学させてもらうのが楽しみだ。

通されたサロンには、すでにお茶のしたくが整っていた。どうやらお茶会のようだ。

数人のメイドさんが壁際に控える中、ソファから立ちあがった人物にフミは目を見張った。

「ヨウコソ！」

ダンディな風貌のその男は、早足にフミへと近づくと両手を取ってぶんぶんと振った。握手だ。しかもかなりフレンドリー。

「……王様？」

「フミチャン、ヨウコソ」

何度もうなづく王様のうしろでは、美しい織りのシヨールを肩にかけた女性が「やれやれ」とためいきをついた。

「この人、イエーン語は『ヨウコソ』しか知らないのですわ……はじめまして、フミ。私が王妃のアメデです」

そこでようやくやくフミは、王様がわざわざフミの母国語のイエーン

語で『ようこそ』と言ってくれたことに気づいた。かなりアヤシイ発音だったから、覚えてたのだろうか。

「息子達をご紹介しますわね。奥の席にいるのが長男のクレマン。その隣が次男のセドリック。そしていちばん端がオーベルですわ」「こほん、そして私が国王のブランシヤール三世である。さあ奥のテーブルへ……ああ、お付きの方々には別室にお茶を用意させてあるからそちらへ案内させよう」

いきなりマリ達から引き離され、ひとり残されるフミ。緊張で手にした袋ごとカタカタ震える。

「荷物はこちらへ置くといい……ん？　どうかしたかね？」

「あの、コレ……」

皆の注目が集まる中、フミはもたもたと袋から箱を取りだした。

「お土産です」

「まあ、ありがとう！　何かしら、開けても構わない？」

王妃様の笑顔に、フミはコクコクと首をふる。テーブルの上で包み紙をごそごそ開く王妃様……中から出てきたのは。

「これは……食べ物かしら？」

「はい。うちの国では人気のお菓子です。甘くゆでた豆の煮汁を、海藻のエキスで固めたものです」

「ゆでた汁を、海藻で固める？」

「ええ。冷たくすると、いっそう美味しいですが……もちろん、そのままでも食べられます」

王妃様は箱を抱えたまま、テーブルのそばに立っている三人の王子にふり返った。

「せっかいですから、いただきますでしょうか」

そのとき三人とも「はあ」だの「ええ」だのイマイチ覇気の無い返答をした。その中に、どこかで見たアイスブルーの瞳。

「あ……検問所の」

真ん中の男性はフミを見つめ、そつと人指し指を唇に押しあてた。フミはあわてて言葉を切り、それから内心ドキドキしながら席に付いた。間違いない、あの時の検査官だ。でもどうしてこんなところに？

いや逆に、王子ならばどうして検問所にいたのか？

フミがテーブルに着くと、改めて全員の自己紹介を一人ずつしてもらった。

とうぜん、緊張でいっぱいはいっぱいのフミには名前はおろか、顔すら覚えられそうにない（今のところは）……なんせこの国の人間はそろいもそろって色素の薄い肌や髪をしている。瞳の色もさまざまで、混乱するばかりだ。

フミのお菓子が切り分けられたが、それすらも喉に通りそうになり。けっこう気が小さかったんだな、自分……とフミは自己発見する。

「……不思議な味ね」

「そうだな……」

国王夫妻の微妙な感想が飛び交う中、お茶会は静かに終わりを迎えた。

(3) ホームシックな味

お茶会のあと、フミは部屋へ案内された。

「おふとん！」

扉が閉められるなり、フミは大きなベッドによじのぼって横になる。

わあっ、気持ちいい……。。

わずか三秒で眠りに落ちていた。
だが、次の瞬間。

「……………様、姫様！」

強く揺り動かされ、フミはいやいやながら薄っすらと目を開けた。

「夕食のお時間ですよ！」

「……………いない、明日食べる」

再び目を閉じたフミは、さっきよりも強くゆさぶられた。

「だめですよ、姫様ったら！ お支度しないと……………15分以内に」

「……………15分？」

……………どこから、その数字が？

「お疲れのご様子だったからギリギリまで起こさなかったのですけ

ど、せめてお着がえはしませんと。髪もクシを通せばいいですから、ね？ だから起きてくださいまし」

……お着がえ。

フミはがばつと身を起こした。

「しまった、今なんじ!？」

「18時半ですわ」

「夕食会は19時からだったっけ？ 間に合うかな……」

「間に合うかな、ではなくて間に合わせなくては! さあ、おふとんから出てください。お召し物はこちらです。髪はご自分でとってください」

マリからクシを渡されたフミは、心底自分の髪が短かったことに感謝した……姉姫のサツキのように腰まで長い髪なんてしていたら、とかした上に結びあげなくてはならない。

襟足でぱつっん、と切られた黒髪は癖も無く、黒い漆塗りのクシが簡単に通る。整えるのはわずか十秒で済んだ。

それからマリに手伝ってもらい、国から持参したイエーン国の正装を身に付けた。ウエストのリボンが分厚くてキツクてつらいのだが、これはもう王族として生まれたものの務めなので仕方がない。

「さあ、ダイニングルームへご案内しますわ!」

「部屋の位置は分かるの?」

「さつきお茶のとき知り合いになった侍女のひとりに教えてもらいましたの。それにしても、こちらのお茶菓子はおいしゅうございませわね。特にあのタ……タルタル、とかいうのが」

「たるたる?」

おしゃべりを続けながらも、二人は廊下を早足に通り過ぎる。マリの足取りに迷いはなく、間もなく二人はメイン・ダイニングルームの入り口までやってきた。

「さあ、ここからは姫様お一人でいってらっしゃい」

「……マリはどこにいるの？」

「私は別に夕食をご用意してもらってますの。ほら、笑顔」

フミは無理やり笑ってみせた。

マリはちよつと苦笑をして、それからそつとフミの背中を押した。

それから二時間。

マリが迎えにくるまで、フミはなんとか夕食会を乗り越えることができた。

大きなダイニングテーブルには、国王夫妻と王子達だけではなく、ユーロレリア王家の親類縁者も加わってにぎやかなものとなった。

フミは頭上にぶら下がるシャンデリアが落ちてきそうので、食事中なんども高い天井を見上げた。丸ごと落ちなくても、重たそうなクリスタルの飾りのひとつやふたつ外れて落っこちそうので、自分のお皿と見比べて冷や冷やし通しだった。

前菜やスープは盛り付けも美しく、味も良いのだがボリュームがありすぎた。コツテリした料理になじみのないフミは、出された料

理の半分も食べられない。疲れた体に油っぽい料理は胃にこたえる。それでも皆が注目する中、フミはなんとか笑顔を浮かべつつデザートに手をつけた。

クリームたつぷりのケーキは、スポンジのところだけ食べた。

「ではフミ様は、王宮学校へ通われるのですか」

「町の施設や、観光名所へも足を運ばれるのでしょうか」

「こちらの祭典や行事にも王家の一員として参加していただきますよ」

「お勉強の合間にも、遠乗りやピクニックなどへ行かれると……」

もう、胸もお腹いっぱい、だよ……。

目のまわりそうな気分で食事会を終え、迎えにきたマリと自室へ戻ったフミはぐったりしていた。

天蓋付きの大きなベッドに倒れるように横になると、ふと部屋の内装に目をとめた。

……部屋は思いがけず、ラブリーだった。

やわらかいピンクの小花模様を散らした壁紙に、レースがふんだんにあしらわれたリネン。小振りの小さなソファーには、愛らしい小鳥の刺繍がほどこされたクッションがふたつ。

「……カワイイ部屋だなあ……」

「きつと姫様のためにご用意されたのでしょうか。あとで国王夫妻にお礼を言ったらよろこばれますわ」

やさしくマリアにさとされ、フミはベッドにふせったまま頭だけ動

かして返答する。

そこにノックの音が響いた。

「姫様、お疲れのところ失礼します」

現れたのは、イエーンから同行してきた護衛団長のカルベだった。手にはなにやら包みをかかえてる。

「こちらの品物をユーロレリアの騎士団長から預かって参りました……第二王子からだそうです」

「第二王子？」

ふと、フミの脳裏にアイスブルーの瞳がよみがえる。受け取った包みをそとのぞいてみると、中には白い固まりのようなものがのぞいている。

「……穀物の、丸めたの？」

「あら、お米ですわね！？ これは一体……」

取りだした食べ物を前に、フミとマリは二人で首をひねる。するとカルベに「こちらも言付かって参りました」と小さなカードがのったお盆を差し出された。

そこにはこんなメッセージが記されていた：

『乾燥させた魚と一緒にどうぞ』

フミははっとして、それからジワリ、と涙が浮かばせた。初めてのホームシック体験だった。

(4) 王子様？

「……こちらが第五蔵書室です。主に海外の書物を取り扱っております。先々代国王エドモンの時代に大改装されて以来、特に古い物に関しては奥の貯蔵庫で管理されるようになり保存状態も……」

フミは失礼ながらもあくびをかみ殺していた。

ただいま第一王子クレマンの案内で、宮殿の一部（全部いっぺんには無理なくらい大きい）を案内してもらっている真っ最中だ。

クレマン王子の説明はよどみなく、つつかえもせず、スラスラと流れるように続く。良く言えば流暢だが、悪く言えば変化に乏しい。

「さて、こちらが中庭のひとつです。私が案内できるのはここまで、次は弟のセドリックに引き継いでもらう予定です」

「朝から長い時間……じゃなくて貴重な時間、をありがとうございますました」

ふかぶかとおじぎをしながら、フミは言葉の選択を若干あやまっしてしまった。しかしクレマンは特に気にする様子もなく、ただ庭に視線を走らせていた……弟王子をさがしているのだらう。

中庭は、黄みどり色の葉が生い茂り、まだ朝日のけだるさが残る日を浴びてキラキラとまばゆく輝いている。

「なんか夢のようですね……」

「気に入ったのなら、いつでも自由に入ってもらって構いません」

まるで事務的な口調に、フミは愛想笑いを返すにとどまった。

「……ところであいつは一体どこに……あそこか。セドリック！」

クレマンの呼びかけた方向には、大きな噴水がすずやかな水の音を奏でていた。その周りを取り囲むかのように、数人の女性が水といっしょにさざめくような笑い声を立てている。

フミはその中心に、長くきれいな金色の髪を持つ人物に目を留めた。その人は軽く片手をあげ、こちらへゆっくりと近づいてくる……。

「早かったね」

「ああ、予定よりも少しだけ、な」

驚いたことに、女性のひとりに見えたその人物は実は男で、しかもセドリック王子だった。フミは目を見張り、ついぶしつけにジロジロと眺めそうになるのをあわててこらえる。

「おはよう、お姫様。昨夜はよく眠れた？」

トロリとこぼれるような微笑を向けられ、フミは不思議な思いでまばたきを繰り返した。背はかなり高いのに、王子はどこか中性的に見えた。

「さ、いこうか」

手を取られ、フミは引つ張られるようにセドリックのあとをついていくことになった。ふり返ると、クレマン王子は中庭を出ようとしているところだった。

「あの、ありがとうございます……」

遠慮がちの、か細い声になってしまったが、フミの声はしっかりクレマンに届いたようだ。クレマンは視線だけで会釈を返すと、廊下へと吸い込まれるように消えていった。

「まずは中庭からまわろうか。ずっとクレマンの相手では疲れたでしょう？　しばらく頭をからっぽにして、綺麗な物をただ純粹に愛でようじゃないか……うん、それがいい」

セドリックは予想外におしゃべりだった。

「お姫様は、どんなお花が好きかな……好みは分からないけれど、似合いそうな花ならいくつか思い浮かぶんだ。ほら、これなんかどう？」

ゆるやかな動作のわりに、引く手の力は強く、フミはあやうく王子にぶつかりそうになった。白い手が指ししめすのは、花壇に咲いた小さなヒマワリ。

「ヒマワリ、ですか」

「あれ、ご不満？」

「い、いいえっ、決してそういう意味ではっ……！」

セドリックはクスクスと楽しそうに笑った。

「ほら、そういうところがこの花をイメージさせるんだ」

そんな調子で、フミは散々庭を連れまわされることとなった。その間も、王子の饒舌は続いていた。

やがてフミの足がもたつき始めたころ、王子は「そろそろ休憩にしようか」とさらに庭の奥へといざなう。背の高い木々をいくつか縫うように抜けると、二人は再び宮殿の一角にたどりついた。

「ここ、厨房の裏口になっているんだ。今ジュースをもらってきてあげる」

王子は粗末な木製の扉に身をすべらせ、フミの前から姿を消した。しかし、ひとり残されたフミが不安になる前にセドリックは戻ってきた……片手に背の高い、細い筒のようなグラスを持って。

「どござ」

「あ……ありがとうございます」

薄く繊細なグラスの中には砕いた氷がつめこまれ、それを覆うように桃色の液体がゆれていた。

フミがそっと口をつけるのを、王子はまるで感想を待つかのようにじっと固唾を飲んで見守っている。

「おいしい……初めてです、こんな味」

「よかった。こっちにも、口に合う食べ物があった」

その言葉で、フミは昨夜の夕食会の料理を思い出した。

「すみません、せっかくのお料理、あまり食べられなくて……」
「気にしなくていいよ。ああいう料理は、僕たちもめつたに食べないんだ。いつもはもっと、肩のこらない食事をしているよ」

それから昨夜の『差し入れ』のお礼もまだだった。

「あと、オムスビありがとうございました」

「オム……？ ああ、あのお米ね。あんな感じであってた？」

「はい、さっそくマリと一緒に、魚の削ったものをかけて食べました」

「そう、それはよかった」

王子が嬉しそうな様子で髪をかきあげると、金糸のようなそれが風によってやさしく波打った。

(5) 裏事情

ふわふわ、きらきら。

フミが目の前の方の光景に擬音をつけるなら、そんな感じだ。手を伸ばせば届く距離にそれはある。

「あの……」

おずおずした問いかけに、セドリック王子は微笑を浮かべて首をかたむけたので、『ふわふわ、きらきら』に『さらさら』が加わった。

「あのう、髪、触らせてもらえませんか」

「えっ、これ？」

そういつて無造作につかまれた金色の糸に、フミは真っ赤になつてコクコクとうなずく。

「どござ」

「……」

手の中でやわからく波打つ、金色の束。フミはこんな綺麗な髪を見たのは生まれて初めてだった。何度も何度も飽きずに手の中の髪をなでつける。

「きれい」

ようやく口に出た感想は、とっても簡単なものだった。

長く、しんぼう強くフミにされるままに首をかたむけてジツとし

ていた王子には申し訳ないくらい、とフミは思った。

「なかなか切る決心がつかなくてね。女みたいでしょ」

「はい。よく似合っています」

「……」

王子がだまってしまったので、フミは何かまずいこと言ったかと心配になってくる。

「あの、男の人の格好も、似合っていました」

「……」

「検問所での、制服姿も」

セドリック王子は、今度ははじけたように笑いだした。

フミはいつそう頭を悩ませることになった……… いったい自分は、なにか面白いことを言っただろうか、と。

午後は三番目の王子オーベルとお茶を飲む予定になっていた。

待ち合わせしたサロンには、すでに到着していたオーベルが窓際に立っていた。

「やあ、お疲れのご様子で……… 昨夜はよく眠れましたか」

「お招きありがとうございます。おかげさまで、よく眠れました」

「目の下にくまが出来てますよ?」

オーベルのからかうような声音に、フミはあわてて自分の両目

の下をおさえた。

「ははは、まあいいや。どうぞ座って」

「はい……」

「そんなかしこまらなくていいですよ。あなた、僕より年上でしょう？ たしか十八でしたっけ」

「はい、その通りです」

「僕は十四だから……四歳差か。まあギリギリ障害にはならないかな」

フミはオーベールの言葉がちゃんと理解できなかった。いや、ちゃんと理解していると思うが……障害とはいったいなんのことだろう？

「あれ、どうしました。まさかご存じないとか」

「いったいなんのお話ですか」

「えー……じゃあお話ししますから、まずはこちらの紅茶をどうぞ。

あ、お菓子はどうします？ タルト・タタンは好きですか」

「た、たるたる……？」

「タルト、タタン、ですよ。あなたの侍女の方がおいしそうに食べていた、とうちの侍女から聞いたもので、それならば姫のお口にも合うかもしれないと思って用意させたんです」

フミは昨夜、マリが言っていたことをぼんやりと思い出した。そうか、これが『たるたる』の正体が……。ひとくち食べてみると、なるほどこれはおいしい。

「それで本題に入りますが、あなた、まさか単にお勉強をするためだけにこの国へやってきたとは思っておられませんよね？」

「……？」

「あれ、本当にそのつもりだけ、で？ ご両親から何も聞かれてな

いとか？」

お菓子を口いっぱいにはおぼったまま、フミは首を横にふった。

「ふーん、まあ僕から話してもいいか。どうせすぐ分かることなんだし」

「？」

「あのね、君、僕たちの花嫁候補なんだよ」

フミはぐつとお菓子をノドにつまらせかけた。

「ぐほつ、げほげほげほ……」

「ああ、大丈夫ですか。ほら、お茶を飲んで……鼻かんでください」

フミは真つ赤になりながらナプキンで鼻と口をぬぐう。

それにしても、花嫁候補とは………いったいどういうことなのだろ
う？

「東の国イエーンとの縁組は、我が国ユーロリアにとってメリットがあるからです。東の海洋の守りも固められますし、またイエーンは小さな島国ですが希少価値の高い薬草など用いた高度な医学で有名です。国民の識字率も高く、現にこうして王族の姫君さえ他国の言語を操るほど言語学に精通されている」

フミはあっけに取られていた。

この王子、フミより四つも下なのに、ずいぶん大人っぽい物言い
する。

「まあ、そういうわけで、あなたはうちへいらしたわけです。王子は僕をふくめて三人、よりどりみどりですよ」

「はー……ぜんぜん知りませんでした」
「だろっね。そんな顔してる」

オーバールは皮肉な笑いを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3499v/>

姫君は留学生

2011年8月8日13時30分発行